

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 前米大統領の英語 (32)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後藤 寛

本会での追究目標である体系としての Basic の方法論(orthology)のためにはまずは全 Basic 語彙(850+ α 語)の厳密な輪郭取りは当然で、今さら言うことではない。念頭に置くべきは今日的にさらに研究が進展している構造主義言語学(structural linguistics)・ポスト構造主義言語学(post-structural linguistics)に基づく音素(phoneme)分析から音韻論(phonology)・音素論(phonemics)、またこれとの関わりから言理学・言語素論(glossematics)、さらに変形生成文法(transformational-generative grammar)風の語彙概念構造(lexical conceptual structure : LCS)への注目となる。このあたりの一端は昨年と本年の本会 *Year Book* (No. 72, No. 73)でも扱ってはおいた。

なお、phonetics (音声学)とは違い、phonology (音韻論)は英語の非母語話者である日本人の聴覚脳でも言語学として理論的に説くことはできる。スイスの F. de Saussure (ソシュール) [厳密には先輩でロシアの B. de Courtenay (クルトネ)] に始まった構造主義言語学的には音韻論は langue (ラング) である。音声学は parole (パロール) で、言語学というより物理学の専門分野となる。音響音声学(acoustic phonetics)など、まさに物理学である。音韻論と音声学は本来的には違うということである。

英語など個別言語の音声は、たとえば日本音響研究所と大学の理工系学部・学科の産学共同研究が望まれる。物理学的音声学に対し、言語学的音韻論は上記 B. de Courtenay が最初に提示した抽象的でメンタル (心的) な概念である phoneme (音素) の -eme (素) の体系研究であり、meaning (意味) の問題追究と深く関わる (音素の研究は物理学での粒子に対して素粒子の研究とも比喩的に言えようか?)。今日、インターネット上で音声から文字への瞬間変換は構造主義言語学の産物である phonemics (音素論)を背景にしている。文字からの他言語への瞬間翻訳は意味論(semantic)が絡む。

いずれにせよ、本連載での「語(words)の音と意味の一体化」からの語釈という観点からは英語の聴解力(listening comprehension)も、それを補うものが文字からの読解力(reading comprehension)となる。comprehension (理解・理解力)は動詞形 comprehend の語根部 *prehend* が「つかみ取ること」の原義をもち Basic 語 **prison, surprise** などと同系だと前々回(No.30)で言った [拙著(2016)、松柏社、第二部、例(22)参照]。

今回も Basic 語との関わりで Trump 前大統領の tweets 中の語に注目するとともに在任中の言説の軌跡を追ってみる。

(1) No Collusion, No Obstruction, Complete and Total EXONERATION. KEEP AMERICA GREAT! (March 24, 2019)

▲短く簡潔な tweet であるが、2016 年の大統領選以来くすぶりつづけたスキャンダル(scandal)で、いわゆるロシア疑惑(Russiagate)がモラー(R. Mueller)特別検察官の調査結果ですべて晴れたとして、Trump 氏は Twitter にこれを書き込んだ。「共謀はなかったし、司法妨害もなかった、まったくの潔白だ、アメリカを偉大なままに！」と言っている内容である。これで大統領に対する弾劾訴追(impeachment)は事実上なくなった

(Trump氏はtweetで No Collusion, No Obstruction を NO C OR NO O! という書き方をしたこともあるが、この正字法は印象的であった)。ただ、ペロシ(N. Pelosi) 民主党下院議長とシューマー(C. Schumer)上院院内総務は、バー(W. Barr)司法長官(当時)に報告書の一部(概要)ではなく全面的な公開を迫ることとなった。

太線語 *total* はプラスα Basic語でありイタリック体としておくが、古代ゲルマン系諸言語〔Teutonic (チュートン語)〕の *total* < Teuton (チュートン民族) に由来するとされていて、*the whole Teuton tribe* (すべてのチュートン民族) の意味のように説く専門文献がある。さらに文献をひも解くと「すべてのこと」が「膨らんでいること」の意味ニュアンスを含み、膨らんだ果物の *tomato* さらには Basic語 *potato* と同系となるが、やはり語形・音形が似ている。PIE etymon の音素形はその1つとして /TEUE/ が復元されている。また謎かけなら「*total* と掛けて何と解く?」「*potato* と解く」、「その心は?」→「原義(root sense)は共に<膨らんでいること>で同系語」となる。

太線語 *exoneration* は彼らにとっては常識語であるが、日本人には難語の1つと言えよう。しかし接頭辞 *ex-* (= out, away) に注目すればよい。必ず *to get something out* の意味である。文脈推理をするのである。よく読み込むとプラス(+)のイメージ語であることが見えてこよう。*exoneration* は「免除」の意味である。

ここでは *collusion*, *obstruction*, *complete*, *exoneration* の4語がいずれも、それぞれ接頭辞 *co(l)-*, *ob-*, *com-*, *ex-* をもっている。語の意味推測では語根とともに接頭辞から、そして文の意味理解では文脈全体から推理することの重要性を強調しておきたい。

付け加えて、上で *scandal* という語を用いたがこれは同系語パノプティコン(PPE)〔本連載 No.11 参照〕からは Basic語 *scale* が同系で、原義は「少しずつよじ登ること」である。この「少しずつ」であることはポイントと言えるだろう。そもそも *scandal* もそういうもので、人から人へ少しずつ伝わるうちに誤解もされ曖昧ともなる。この世につきものの *scandal* であるが Trump氏は大物で、こういうものを実際には気にかけはしなかった。他の同系語に *escalate*, *descend*, *ascend*, *scan* などがある。PIE etymon の形態言素形(形態音素形)は/SKAND/が定説である〔同上拙著、第二部、例(88)参照〕。

なお、特別捜査弁護人による報告書の結論書き文末では、次の cf. のように記された。下線部 *while this report..., it also...* は絶妙な言い方で、要するにこの報告書が大統領の潔白を証明するものではないということ、すなわち証拠不十分だということになる。

cf. “The Special Counsel states that ‘while this report does not conclude that the President committed a crime, it also DOES NOT EXONERATE him.’”

(2) ... Mexico must stop illegals from entering the U.S. through their country and our Southern Border. ... If Mexico doesn't immediately stop ALL illegal immigration coming into the United States through our Southern Border, I will be CLOSING the Border, or large sections of the Border, next week. ... (March 29, 2019) [3つに分けて書かれた長いものであったので、ここでは破線部を省略し1つにした]。

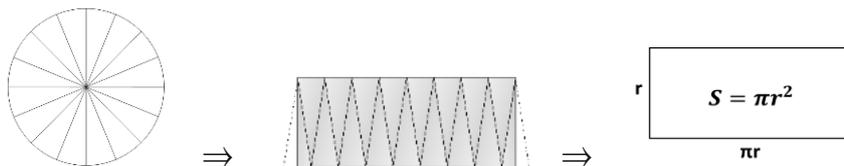
▲メキシコは米国への不法移民を阻止せねばならない。直ちに全不法移民集団を阻止しないなら来週に国境、またはその大部分を閉鎖するという内容で、日本のメディアもこの tweet を取り上げ報道もした。ただし、Trump氏はその後これを撤回はした。

太線語 *immigration* は他国からの移民、これに対し *emigration* は他国への移民であるが、双方とも「変化すること」という原義をもつ。PIE etymon の音素形は/MEI/と

され、immigration は{im (= in) + migr (change) + ation}である。migrate (移住する)、mutation (変化・変形・突然変異)、permeate (浸透する)などは同系語であるが、実はギリシャ系の am(o)eba (アメーバ)とも同系で、アメーバは常に形を変化させ分裂する単細胞の原生動物である〔同上拙著、第三部 pp.209-210 参照〕。

ところで上の(1)の tweet の解説中で、scale の原義「少しずつよじ登ること」の「少しずつ」がポイントだと言った。ここでの「少しずつ・徐々に・次第に(little by little / by degrees)」というモノの見方にこだわって考えてみたいことがある。本連載(29)で数理的な微分[積分](differential [integral] calculus)に言及し、これが Basic の形式(form)と意味(sense)を考える上で1つの大きなヒントとなることを示唆した。そして不定積分方程式 $F(x) = \int f(x)dx + C$ がこれを象徴するものだとも言った。

関連して、基本的で分かりやすい例を示しておこう。たとえば、半径 r の円の面積は $S = \pi r^2$ 、その円周は $\ell = 2\pi r$ であることをわれわれはよく知っている。



これは正面から微積分と銘打っては示されていない一初等数学書に示されている図を参考にしたものであるが、実はこれぞまさに微積分である。

すなわち、上の最初の図で面積 $S = \pi r^2$ の円を等分するとともに、2つ目の図のようにその等分する数を少しずつ限りなく極限(limit)まで増やしていくと、3つ目の図のように横の長さ $1/2 \ell = \pi r$ 、縦の長さ r の長方形の面積 $\pi r \times r = \pi r^2$ に限りなく近づいていき、最終的に円の面積はこの長方形の面積 πr^2 そのものとなる。

丸いもの(曲線)が四角いもの(直線)となるが、この背景には微積分がある。ここがポイントである。微分は細かく切って「部分」(parts)に分け、積分はそれを統合し「全体」(unit)のものとする。これを言語と並行させれば定理・公式としての $S = \pi r^2$, $\ell = 2\pi r$ が対象言語(object language)で、今ここで説明した言語が高次のメタ言語(metalanguage)ということになる。関連して付け加えておけば、metalanguage は denotation (明示性)と並行する〔cf. rhetoric は connotation (含意性)と並行〕。

文豪で推理小説作家であった松本清張氏の作品に『状況曲線』があるが、この状況曲線という言葉が示すように、やはり事柄(things)の状況(situation / circumstances)は曲線的なものであろう。状況を見定めるためにその曲線に直線である接線を少しずついくつも引いていくことで、その元の曲線の性質が次第に明らかになる。このあたりは拙稿「BASIC ENGLISH のレキシコン — 旧語表から新語表へ」〔研究紀要 No.15 (2007)、日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)〕でかなり詳細に説いた。メンタルな内面辞書(mental dictionary)であるレキシコン(lexicon)の視点から見る lexicology (語彙論)である。この機会にその一部(2段落分)をやや長くはなるが以下に転載しておこう(文中の破線は今回ここでは省略した部分を示す)。

「... さらにこのあたりの事情はやはり数学的概念である微積分(calculus)での原始関数と導関数の考え方からもアナロジー化できそうである ... 微分すると $2x-1$ となる関数全体は $F(x) = x^2 - x + C$ と書け、単に定数 C が異なるものとなるがこれがこの場合の原始関数である。これは $2x-1$ となる関数全体のことである。すなわち関数

$f'(x) = 2x - 1$ はこの場合の導関数であり、逆にこの導関数（微分関数）からもとの関数である原始関数を求めることが積分である。そしてこの場合これは $F(x) = \int (2x - 1) dx = x^2 - x + C$ (C は積分定数)として求められ、 $2x - 1$ の不定積分のことである。そして不定積分のうち、ある特定の点を通るという条件があれば積分定数 C が定まる ... たとえば点(1, 2)を通るという条件が加われば ... $F(1) = 1^2 - 1 + C = 2$ より $C = 2$ となる。ゆえに $F(x) = x^2 - x + 2$ として求められる ... これの示唆するものが BASIC ENGLISH 言語の形式と意味を説明するのに妥当であるように思える。

すなわち 850 語の語彙体系としての BASIC ENGLISH レキシコンはその意味価 (sense-value) と情緒価 (feeling-value) が不定積分方程式 $F(x) = \int f(x) dx + C$ で象徴的に示され、この意味価と情緒価のうち後者は積分定数 C の決定と相通するものだとしてはどうかということである。形式と意味が BASIC ENGLISH 言語では 1 対 1 の関係で関数的にただ 1 つだけ決まるということ、またそのように決めるのがそもそも BASIC ENGLISH という言語であると言える。(以上、上記拙稿(2007)、pp.1-11 より)

形式(form)と意味(sense)が 1 対 1 で決まらなければ曖昧(ambiguous)ということになる。数学という科学は常に真理を説き示し、フェイクでないところが魅力的である。難しそうに思えるかもしれないが、ここでの微分・積分の概念に関し説いている部分は きわめて基本的であり、大学生などにはまったく 常識的なものである。将来的にはこのあたりも含めて、大学院後期博士課程の学生や修了者の若手研究者により Basic の未知の世界の謎がさらに解き明かされることを期待したい。なお、ambiguous と言ったが ambi は「あちこち歩き回ること」である。ambulance (救急車) などは同系語。

付け加えておくと、本連載(29)でアメリカ手話言語(ASL: American Sign Language)や国際手話言語(ISL: International Sign Language)など人工手話言語の方法が自然言語を考えるのに何かと参考となることについて触れた。ASL ではたとえば、Basic 語(句)でのレキシコン married, get married、また un-Basic 語 marry, matrimony などは単に「両腕を上下に組む」しぐさだけですべてその意味を伝える。これはまったくの一例であるが、このあたりはここでの一連のテーマ趣旨とも結びつく。

試問

1) は前回(31)の(2)で見た tweet、2) は在任中に Trump 氏が掲げた文言より。

1) 下の文中に、**after, for, in, of, over, to, to** のいずれかの空間詞を入れ文を完成したい。何が入るか?ただし、このうち 1 語はいずれの空所にも入らない。

() 52 years it is time () the United States () fully recognize Israel's Sovereignty () the Golan Heights, which is () critical strategic and security importance () the State of Israel and Regional Stability !

2) Make America great again! の下線の Basic 語とそれぞれ同系の他の Basic 語の例で、同じ m, g, a で始まる語を各々 1 つだけ示せば?

make : (m) **great** : (g) **again** : (a)

[正解] 1) 順に After, for, to, over, of, to [前回(31)の(2)の tweet 参照] 2) **mass, grain, against** [make は本連載(15)の(1)など、great は(28)の冒頭、again は(15)の(1)など参照]